

# おろしや・蝦夷<sup>えぞ</sup>・一茶

横松和平太

井上靖の小説に『おろしや国酔夢譚』(1968年刊)がある。江戸時代後期に漂流民となった**大黒屋光太夫**達がロシアに渡り、苦難の末に日本に帰りつくまでの旅を描いた話だ。緒形拳が主演した映画(1992年)にもなった。吉村昭も『大黒屋光太夫』(2003年刊)を書いた。この大黒屋光太夫の事件のことをもっと知りたくなって、『大黒屋光太夫史料集』に目を通した時のことだった。事件の年譜を見ていたら、次の一文に目をひかれた。

「文化3年(1803)11月27日、磯吉は蔵前にあった俳人夏目**成美**(札差井筒屋八郎衛門)宅に招かれ、ロシア話を語る一夕を過ごした。成美と親しかった小林**一茶**の日記によると、当日は句会(隋齋会)が予定されていたが、ロシア話を聞く件がもちあがったゆえ、句会は延期となったとある。以下略」

磯吉とは、沖船頭・大黒屋光太夫と共に帰国した水夫である。一茶はあの有名な小林一茶のことだ。一茶は磯吉からロシア咄<sup>ばなし</sup>を聞いていたのだ。一体いかなる経緯で会うことになったのか？一茶の俳句の中に、ロシアとか蝦夷地のことを詠んだものはあるのだろうか？二人はどんな話をしたのだろうか？俄然興味が更に湧いて来た。

このことを考える前に、まず大黒屋光太夫の事件とその背景を眺めてみたい。

## 北の黒船前夜

ロシアが蝦夷地に国家として本格的に現れたのは、寛政4年(1793)9月のことだった。

東蝦夷地の根室に、ラクスマンがエカテリーナ女帝からの国書を携えやってきた。日本からの漂流民達の返還と通商開始を求めてきたのだ。それまでもロシア人が来航し通商を求めたことがあった。しかし、当時蝦夷地の統治を幕府から委託されていた松前藩は、これを隠してきた。軍事費の増大などを求められることを恐れ、自らの権益を守りたかったからだ。だがこの時は、さすがに松前藩だけでは事は対処出来ず、幕府による直接交渉の運びとなった。交渉は根室から松前へと処も移し約10ヶ月もかかった。漂流民達の帰国は認められ、通商については拒否したものの、長崎への入港許可証を与えることで決着した。幕府には通商を開く考えもあったようだ。開国へのチャンスであったのかもしれない。

漂流民達とは伊勢・白子の神晶丸の沖船頭・**大黒屋光太夫**と水夫・**磯吉**であった。天明2年(1782)に船出し、遭難・漂流して以来、カムチャッカからシベリア、そしてペテルスブルグまで異国暮らしは足掛け11年に及んだ。当初16名の乗組員の内3人が故国に帰れたのだが、小市は根室で病没した。やがてやって来た黒船騒動の前触れは、彼等が連れてやってきたのだった。彼等は、建前上は海外渡航を禁じた法に触れていた。だが、江戸で取調べを受けた後、お咎め無しとなった。但し、禁忌があった。即ち、元の稼業に戻ることに、所属領から出ること、みだりに外国の見聞を語ることに、であった。彼らは伊勢から江戸に身分が移された。寛政6年(1795)7月、九段坂上の番町薬園内(今の靖国神社の辺りらしい)

に住まいをあてがわれ、幕府からは生涯扶持が貰えたとある。幕府は彼等が持ち帰った生のロシア情報や、ロシア語の能力を独占し、対ロシア政策に活用したかったのだ。

江戸の勘定奉行の元で、軟禁状態にされた光太夫と磯吉だが、それなりの自由は認められていたようだ。二人共伊勢への一時帰郷は許されている。何より生きたロシア情報の持ち主だったから、あちこちからお座敷がかかった。まずは海防問題に関心の強い水戸藩、尾張や紀州にも呼ばれたようだ。後のレザノフの長崎入港時には、老中からロシア人が好む品を言上せよ、との諮問も受けた。海外情報に関係深い天文方の役人にはロシア語を伝授。大槻玄沢など蘭学者達の集まりである芝蘭堂しらんの新年会にも呼ばれてロシア服でロシア談義をした。光太夫は人格・見識を認められたのか、学者・文化人達との交流もあった。漂流民光太夫と磯吉は松前・江戸で取調をうけ、『北槎聞略』(桂川甫周)など、事情聴取文書が作られた。光太夫達は松前でも、江戸でも噂となり、情報は自ずと洩れ出た。

## 蝦夷地事情

松前藩は、豊臣秀吉からの朱印状に続き、慶長9年(1604)に徳川家康から黒印状を受けられ、松前に福山城を築くことで始まっていた。蠣崎家が蝦夷地交易の独占を認められ、姓も松前へと変え、石高制を根幹とする幕藩体制の中であって米の生産によらない特異な大名となった。藩は近江商人を中心に蝦夷地の産品(海産物、金、鷹の羽など)の扱いで利益を上げ、飛騨屋、阿部屋といった商人には場所請負をさせ、税金を上納させた。彼らは蝦夷各地でアイヌを厳しい条件で働かせ、鮭・鯨・昆布などを収穫し儲けたという。上方や江戸といった消費地との間の海運で活躍したのが海の総合商社とも言うべき北前船であった。幕府は、松前藩をして夷狄に対する一種の火除け地としてみており、“蝦夷のことは蝦夷次第、の原則により蝦夷地を異域の地とみなし、任せて干渉しなかった。遠く北方の樺太さらには大陸の沿海州の山丹人とも交易し稼いでいたようなのだが、松前藩も幕府に対しては自らの立場を守る為にか情報開示はしなかった。藩は、アイヌが住む蝦夷地と和人が住む和人地とを区画し、和人地にはそれまで雑居していたもの以外のアイヌの来住を禁じた。蝦夷地には和人の居住も許可しなかった。蝦夷地へ出稼おもむくぎに赴く人も許可制とし出入りを取り締まった。だから、実情が伝わるのが少なく、蝦夷地は辺境の地、鬼や獣のような人が住むところとイメージされてきた。

膨大な旅行記を残した江戸後期の人に菅江真澄ますみ(1754~1829)がいる。晩年は秋田藩の地誌調査・編集に携わり角館で亡くなった。歩く民俗学者・宮本常一の先人だった。三河の国の出身で元々は薬草園に勤め本草学を修めていたともいう。信州から歩き始め、奥羽地方を巡った後、天明8年(1788)には松前地方に渡った。西蝦夷の各地を歩き庶民の生活を観察し文と絵を書き残した。彼の旅の覚え書きともいうべきものに『かたみ袋』がある。その中にアイヌの人達の生活、風俗、自然の描写と共に次の文があった。

「赤人の国は、はるけき処にて、ここなるあひアイヌのの嶋よりは、いぬゐ(北西)に行てければ、紅毛ちからほとりに、ヲロシヤという嶋ある也、(中略)おろしやの人は、こころこは

く、あひのの嶋をままおかすことあり。いまはらっこ嶋(ウルップ島)も、おろしやにとられたり」ロシア人は強情で、領土を侵略する夷人と見られている。又、別の箇所では「これを聞伝えし兒女子は、赤蝦夷といへる名よりして、こは恐ろしき鬼人にてもあるやと思ひし事也。是は蝦夷はもと人類の外なる者の様にも心得しうへ、其奥の地に入りては赤人、赤蝦夷、住めりと聞ては、地獄の絵に見へし赤鬼なといふ類のものと思れ、怪しみもありとなり。」

ここで、注目すべきは夷狄としてロシア人が赤蝦夷として登場していることだろう。獣のような人が住む蝦夷地の更に北には、地獄の赤鬼のようなものがある、と庶民には思われたということか。

松前で、ラクスマン達ロシア人と応対した幕府の役人は、彼らの生活ぶりを目撃して書簡の中で次のように記した。「蛮人、愚直なるものかと思ひしなど聞こへ候へども、天文地理、その外窮理の事、智巧しいたす処にて、蛮国は多く深智あり、外柔にして内剛なるものにて候。…」(『魯齊亜人取扱手留』松平定信日露交渉次第)とある。

赤蝦夷は地獄の赤鬼が住むところではなく、文明の先進国であることが、武家や知識人層に知られるようになったのだ。更に、庶民の間にも徐々に浸透していったことがわかる史料があった。

尾張藩の藩士、<sup>こうりきえんこう</sup>高力猿猴庵(種信)の自筆画入り本『猿猴庵合本集・六篇』(1795年頃刊)の中に「ヲロシア器物」という章がある。

名古屋は大須のお寺の境内で「漂民<sup>こいち</sup>小市 追善供養遺品披露」なるイベントがあり、それを実況記録したものだ。ロシア生活を紹介する遺品の数々を、野師の口上と共に見世物仕立てにした。仏事を隠れ簀に焼香料と称してお代を頂戴する金儲け興行だったようだ。御三家でありながら何かと幕府に楯突く気概のあった尾張藩はこれを黙認した。元々は伊勢の小市の菩提寺が行った追善法事が始まりだったが、伊勢各地から伏見桃山まで諸処興行されたい。菩提寺は遺品の貸出し料を決めていたというから恐れ入る。この本は貸本だったというから、庶民の間にナマのロシア情報が流布されていったことになる。

だが、当時の一茶には、こうした最新の情報はまだ届いてはいなかったであろう。オロシヤは夷狄、蝦夷地は未開のアイヌが住むところとしか思っていなかったはずだ。

## 弥太郎、一茶となる

一茶こと小林弥太郎は、宝暦13年(1763)越後に近い信濃は柏原の農家の生まれだ。磯吉と会ったであろうこの文化3年、一茶は44歳、磯吉は43歳とほぼ同年齢だ。一茶は複雑な家庭環境のため、長男でありながら15歳で江戸に奉公に出たという、ずぶの庶民であった。江戸で色々な苦勞を重ねながら、俳諧で食べていくことを目指した。俳句を商売にする俳諧師・業俳にならんとし、専門の宗匠についたり独学で勉強もした。27歳のときには執筆<sup>しゅひつ</sup>となり、宗匠の一步手前にまでなれた。田舎出の農民でありながらなれたのは、彼の才能・努力だけでなく、周りの人から好かれる人柄にもよるのだろうというが。

寛政4年(1793)、30歳の時から宗匠の地位を確立すべく本格的な俳諧修業の旅に西国行脚に旅立っている。旅は足掛け7年に及び近畿から九州、四国、中国へと巡歴した。師匠の主な地盤であった西日本各地の縁故・人脈を主に頼ってのものようだった。光太夫、磯吉らの漂流事件騒動や江戸暮らしが江戸での話題となっていた頃には、一茶は江戸には居合わせていなかったのである。寛政10年(1798)には江戸に戻り、近郊の上総・下総・安房から常陸と関東地方の俳句愛好者達を巡回して歩くなど業俳活動に専念した。そして、ロシア帰りの磯吉と、一茶は江戸で出会ったのだ。

## 俳諧サロン・随齋会

一茶には、江戸での俳諧仲間達との句会を中心とした交遊関係があった。中でも蔵前の札差・夏目成美は大物俳諧師であった。本所の隠居用の別宅「随齋庵」で開く「随齋会」が活動の中心だった。会は七のつく日に開かれていたようだが、一茶は寛政12年(1800)から頻りに顔を出すようになった。会では句会だけでなく、花見とか茶番狂言の鑑賞とかもあった。出入りする著名な俳諧師との交遊もあり、いわば俳諧サロンのようなものであったとか。貧乏をある意味売りにしていた一茶は、この成美から物心両面から世話になった。長逗留したり、飯を馳走になったり、成美はパトロンの存在だったのだ。先述の「磯吉の話」を聞いた、という出来事を、一茶の日記で確認すると、こう出ていた。

「二十七日 晴 ヲロシア漂流人磯吉といふものの咄あるによつて随齋会延引」

夏目成美は足が不自由であったと資料にある。番町の磯吉宅に出向いたのではなく、随齋庵に招いたのであろう。又、資料の中には光太夫と磯吉から聞いたとか、磯吉はレザノフが長崎に連れてきた漂流民の一人であろうか、といった記述が見られたがいずれも間違いであろう。

ところで、夏目成美は一体どんな伝手<sup>つて</sup>が有って磯吉を呼べたのであろうか？

彼は六代目井筒屋八郎衛門というのが商人としての名である。浅草蔵前で札差を稼業としていた。札差は、幕府旗本、御家人の代理として蔵米の売買をしてその手数料を取るのが商売、金融業でもあった。お得意様である武士達の間では、俳諧を嗜む<sup>たしなむ</sup>ものが多くいたはずだ。俳人としての成美は、寛政の大家のひとりとして、人気があり面倒見もよく人脈が豊富であった。光太夫と磯吉は勘定奉行の支配下にあった。おそらく成美は、俳諧好きな旗本達を通じて、そこに磯吉を招くことができたのであろう。公儀の許しなしでかってに呼べないはずだ。又、記録に残っている光太夫が呼ばれた先にも、旗本松平鳩翁<sup>ぎゅうおう</sup>とか水戸藩医の俳諧師<sup>えいびあん</sup>加藤曳尾庵の名前が見られる。

そもそも何の目的で磯吉を招いたのか？ あたかもこの年9月(1806)には、ロシアによる樺太襲撃事件が起きていた。ラクスマンの帰国から10年後の文化元年(1804)、ロシアが幕府からの使節レザノフが、長崎入港許可証を持ってやってきた。今度も仙台藩の漂流民の返還を併せての通商交渉となったが、結局幕府は冷たく通商を全面的に拒絶した。彼等は翌年憤激の内に長崎を去り、この仕打ちは彼の部下による日本への武力威嚇という行動を招いたのだ。外交の失敗ではなかろうか。翌年には択捉島も襲撃される事件も起きている。

これら文化初年の一連の騒動は、近世日本が受けた最初のウエスタンインパクトとも言われ、当然江戸の巷間こうかんを賑わす事件となっていた。

ロシアといえば光太夫と磯吉は、余人をもっては代えがたい格好の語り手だ。ここはひとつコネを使って、本家から聞いて見ようとなったのであろう。随齋会という集まりの果たしていた役割に、俳人仲間の情報ネットワークの拠点であったという見方がある。出這入りする俳人達は情報を持ち寄り、収集し交換する場として活用していたと思われる。磯吉の招待は、サロンが主催した時局イベントみたいなものだったのでは。

ロシアでの体験やら蝦夷地での出来事などが話題となったのであろうが、磯吉からどんな話を聞いたのか？。これについては残念だが、史料もなく分からないのが残念だ。

## 世間師・一茶

サロンを主催できた裕福な商人であった成美と、専業俳諧師といってもまだ宗匠ではない一茶では大きな違いがあった。食べていくためには、江戸でただ留まっているわけにはいかない。江戸近郊の各地の俳句愛好家達を巡って歩いた。俳句や発句の作り方を添削指導したり、江戸の噂話などを提供して、幾ばくかのお金を貰ったり一宿一飯の世話になったりしていたのだ。世間の噂話は大切な営業ネタであり、その仕入れ先として随齋会などといった俳諧サロンや句会があったといえるのでは。

身分制社会の壁も厚く、宗匠にはとうとうなれなかった一茶は、度々故郷に帰ったが、文化9年(1812)からは故郷柏原に戻り定住した。ここを拠点として活動した。放浪の俳人とも呼ばれることのある一茶だが、井月や山頭火とはかなり生き様が違うのだ。江戸にあって信濃にあって、常に帰る寝ぐらを持ち、そこを拠点として生活の為に旅に出かけたのである。そこが一所定めぬ漂泊の人生をおくった俳人とは異なるところだ。

一茶という人は記録魔としても有名な人であり、諸国の俳人との手紙のやり取りから旅や日々の暮らしのメモまで、膨大な記録を残した。俳諧業界きっての情報通を目指したのかもしれない。宮本常一の名著『忘れられた日本人』のなかに、「日本の村々をあるいて見ると、意外なほどその若い時代に、奔放な旅をした経験をもった者が多い。村人たちはあれは世間師だといっている。旧藩時代の後期にはもうそういう傾向がつよく出ていたようであるが、…」とあった。世間師は“しょけんし、とも”“せけんし、とも”読むらしい。思えば一茶は、故郷の人達からみれば、若い頃から江戸や西国に旅をして、世間の情報に詳しい物識りだった。情報通でもあった彼は、いわば世間師であったといえそうだ。

旅に出では情報を仕込み持ち帰り、そして情報をネタにして俳諧商売をした一茶だが、異国情報に特に関心が深かったようだ。長崎から江戸へ献上駱駝らくだがやってきた事件があったが、一茶は俳句とも川柳ともつかないような「おらんだ渡大馬 日本のとしをとるのがらくだ哉」と詠んでいる。異国との南の窓口といえば九州・長崎だが、若い頃の西国修業の途次、長崎を訪ねており俳句もある。琉球にも関心があったのか、先の磯吉の話聞いた三日後には、“琉球人上野二入、”と日記にある。琉球王国の謝恩使が上野東照宮に参詣した

のを見物に行ったのか。異国風の衣装と音楽による珍しい行進を見たかったのだろう。翌月4日の日記にも“琉球の医師葬、とある。噂を聞いてちゃんとメモしていたのだ。

異国との北の窓口といえは蝦夷地だ。一茶の俳句には“蝦夷、とか“おろしや、という言葉が入った句が、実は沢山ある。あの“磯吉の話<sup>さかのぼ</sup>を聞いた、随齋会<sup>さかのぼ</sup>を遡る数年前から登場している。彼は勿論蝦夷地に旅したことはなかったが、蝦夷地に関心があり、北辺の情報<sup>さかのぼ</sup>を仕込んでいたのだ。だから、磯吉の話には大変興味があったのではなからうか。

## 一茶句にみる エゾ・おろしや

一茶は若い頃からよく勉学に努めているが、彼の俳句には国学思想の影響が見られるものが多くあるという。“君が代、とか“天皇、“日本、といった言葉をよみこんだ愛国・国粹的な句も多い。右よりの人だったのだ。

ロシアや蝦夷地のことが再び話題となった、文化元年(1804)9月レザノフの長崎来航事件の直後、その12月にすぐに彼は反応している。磯吉にまだ会っていない時のことだ。

### 神国の 松をいとなめ おろしや舟

#### 梅が香や おろしや<sup>はわ</sup>を<sup>みよ</sup>這わす 御代にあふ

松とは松平氏を指している。幕府の外交や我が国の神の権威にロシアは何もできない、どうだ！と言わんばかりだ。日本を「神の国」とし、ロシアを「夷の国」と見下している。

同じ文化元年、東蝦夷地を既に直轄化(1799年)していた幕府は、厚岸<sup>あつけし</sup>など三ヶ所にお寺を建立した。アイヌの和人化政策による蝦夷地の経営の始まりであった。更に文化4年(1807)には、松前藩を改易し蝦夷地全島を直轄化、アイヌへの和風強化に乗り出した。

例えば、アイヌへの懐柔策として御救交易なるものをまず実施。穀食推進肉食禁止、日本語の使用、和服の着用、住居の和風改変、仏教寺院の建立等いわゆる和人化策の実施だ。アイヌがロシアの南下により影響されるのを防ぎ、日本人化させることで対抗させようとしたのだ。何やら明治に入ってから帝国日本の植民地政策の原形を見るような気がするが、どうだろう。これにも一茶は、俳句で反応している。仏教文化で蝦夷地の果てまで未開の地が教化されることを願ったのだろう。

#### 初雷<sup>はつらい</sup>や エゾの果迄<sup>はてまで</sup> 御代<sup>みよ</sup>の鐘 文化元年(1804)11月

磯吉からロシア話を聞いて(1807年)、更に蝦夷地への意識がたかまったのかこう続く。

#### 御仏<sup>みほとけ</sup>やエゾが島へも御誕生 文化8年(1811)5月

#### 花さけや 仏法わたるエゾガ島 文化9年(1812)2月

文化9年(1812)には、50歳にして故郷柏原に腰を落ち着け始めた。超晩婚だが所帯持ちともなり(1814年)、おらが春を迎えたが、蝦夷地への関心は更に続いた。

#### えぞ鱈<sup>えたら</sup>も 御代<sup>みよ</sup>の旭に 逢いにけり 文化12年(1815)10月

#### 塩引きや エゾの泥迄 祝はるゝ 文化13年(1816)11月

#### 芭蕉忌や エゾにも こんな松の月 文政3年(1820)10月

雪深い北信濃の地にも、北前船で蝦夷から鱈や鮭がやってくる。だが、これらの句にも蝦夷地は、ただ風雅もない未開・辺境の地という見下し意識・偏見が透けて見えそうだ。

文政3年(1820)は、還暦を前にして最初の中風を発病したりした年だった。還暦を迎えたのは文政5年(1822)だが、この年にはこれ迄とはかなり異なった蝦夷句を作った。

江戸 <sup>ふう</sup> 風を吹かせてゆくや 蝦夷が島	文政5年(1822) 4月
来てみれば こちが鬼なり 蝦夷が島	同上
商人 <sup>あきんど</sup> や うそうつしに 蝦夷が島	同上
銭金 <sup>ぜにかね</sup> を しらぬ島さへ 秋の暮	同上

これらの句の背景には、寛政11年(1799)から文政4年(1821)まで続いた幕府による蝦夷地の直轄化政策があったと思える。幕府は、松前藩が行ってきた場所請負制を廃し、自ら直接交易を始めた。食料品の供給や蝦夷地の産物の売買に江戸の息のかかった商人も進出させた。エトロフの開発に乗り出した高田屋嘉兵衛などもそのひとりだった。

アイヌに対しては、酒・煙草・食料品などの「被下物<sup>くだされもの</sup>」を渡したりして、それまでの場所請け商人達の横暴さから介抱する立場をとつた。風俗の和人化政策と併せて、アイヌが離反しロシアからつけこまれることを防ごうとした姿勢をとつたのだ。

松前藩や場所請負商人達のかつての苛政の故なのか、それでもやはり、アイヌの多くは、漁業労働者としての暮らしはますます厳しくなり、衰微していったという。こうした実情を、何故か一茶は見抜き、知るようになっていた。

それまで農民・一茶は、蝦夷地は「鬼のような姿の人が住み」、「風雅や文化も寺もない」、「銭金さえ知らぬ」未開の地だと思っていた。中世以来の庶民の蝦夷地のイメージを抱き、偏見を持っていた。しかし彼は、蝦夷地の実情を知ることによって蝦夷地観を変えたのだ。アイヌから「江戸風」を吹かせて暴利を貪る日本の「商人」こそ鬼ではないか！と。痩せ蛙や蠅にも優しい目を注いだ、いかにも庶民派の一茶らしい目線ではなからうか。何と鋭い感性だろう。一茶は、これらの句を江戸で詠んだのではない。まして蝦夷地には行ったこともない。では、どのように蝦夷地の情報を知り、その見方を変えることになったのか？そこには何があったのかを、次に考えたい。

## 北辺事情の情報源

草深い信州の片田舎を拠点に活動していた一茶が、いかにして蝦夷地の実情を知りその見方を変えるに至ったのか？。文字情報つまり書籍を読んだのだろうか？

北辺が騒がしくなってきた頃、蝦夷地やロシアの事情通といえば、まず**最上徳内**(1754～1836)であろう。彼は出羽の国は楯岡村の農民出身。苦勞をしたが、その才能と努力を認められ武士に取立てられ、幕府普請役まで出世した男である。田沼意次時代の天明5年(1785)の蝦夷地探検隊に加わったのを始めとして、都合9回も蝦夷地・千島・樺太を踏査した。通算12年間も北辺で滞在し、アイヌ語、ロシア語にも通じた事情通だった。松前藩からは幕府の隠密として危険人物とも見られたこともあった。彼は著述活動にも熱心であり、寛政2年(1790)から寛政12年(1800)にかけて「蝦夷草紙」を書いた。この書は蝦夷

地に赴く幕府役人必携のテキストとされ、写本の形で広く流布されたという。更に『渡島筆記』の中では、アイヌの生活を書いた。文化5年(1808)のことだ。松前藩のやり方には批判的だったとされる。写本を例の夏目済美の筋などから入手し、これも一茶は読んだのだろうか？読まないまでも、江戸では噂咄による口コミが盛んだった。耳から入ったか。

一茶は、江戸を離れても俳諧師仲間達とは盛んに手紙・書簡のやり取りをしていたことが知られている。飛脚や、俳諧の門人・友人達の連絡網、時には旅人や便利屋に託すこともあったようだ。通信の範囲も残された資料によれば、江戸だけでなく、東北、関東、関西、四国、中国、九州と驚く程幅広いという。晩年の信濃暮らし15年間の記録を見れば、交信相手の俳人45人、230通とある。実にマメな人だった。こんなネットワークの中から、蝦夷地に関する情報も居ながらにして入ってきたのかも知れない。交信記録の中に、只一人蝦夷地の人<sup>つな</sup>がいた。箱館の吉田<sup>ふせき</sup>布石という俳人から、文化12年(1815)手紙を受信している。北辺事情をこの人から聞いていたのかどうか、気になるところだ。如何なる人物なのか、一茶とどんな繋がりがあったのかを調べてみることにした。

## 松前通人脈

まず布石という俳人であるが、この人は吉田清兵衛といい福島県伊達郡の出身である。義父経営の幕府御用達商・伊達屋の後継として箱館に招かれていたのだ。郷里にいた頃より、北隣の白石出身の俳諧師<sup>しょうそうおつに</sup>・松窓乙二(1756～1824)の弟子であった。乙二は、高位の修験者(山伏)だが、東北俳壇の雄として知られた人物だった。彼は若い頃から、江戸に出た時は、夏目成美の世話になり俳諧仲間と交遊した。文化元年(1804)には随齋会等で、一茶と共に花見に行ったり、友人を見舞ったりして交遊したことが、一茶の日記から分かる。布石は、この乙二師匠を蝦夷地に招き俳諧普及の指導を要請したという。乙二は前後7年間、二度に渡り箱館、松前に滞在した。その間文化8年(1811)には、クナシリで捕縛されたロシア人ゴロブニンを目撃したという。この乙二の紹介で一茶と布石<sup>つな</sup>は繋がっていたのだろう。松前事情に詳しい布石や乙二から、蝦夷地の事情を、一茶は聞き知ったのではなからうか。更に、乙二の交遊人脈には、松前藩の家老<sup>かきざきはきょう</sup>・蠣崎波響<sup>やながわ</sup>がいた。

松前藩は文化4年(1807)に幕府の蝦夷地の直轄化政策により、梁川(福島県伊達郡)に転封された。後、文政4年(1822)に幕府の政策転換により再び松前に戻るまで、15年に亘りいわゆる復領運動に苦労したのが波響だという。彼は、文人画家としても著名であり、梁川時代には商家に画を書き売ることまでしたという。この頃の画に乙二の俳句画賛が入ったものがあつた。伊達藩の最南部白石と、その南の梁川藩は隣合っており、二人は知り合い、往来があつたものと思える。波響は、復領運動の為に松前地の商人達と密接な交流をし、何度も松前地に渡っている。時を同じくして現地で二人は往来したこともあるようだ。

松前にゆくための口実づくりに乙二が協力したのかも知れない。

文政年間の一茶の句の背景には、こうした松前<sup>つな</sup>繋がり<sup>つな</sup>の交遊関係の存在を考えたい。草深い田舎だが、居ながらにして遙か遠く離れた蝦夷地の情報を入手できたのかも。



因みにどうして、松前藩に蝦夷地が復領となったのかについては、幾説があるようだ。わかりやすいのは、ロシア船の来航が、文化8年(1812)のゴロブニン事件以来途絶えて北辺が静かになり、海防意識が薄れたからだという説だ。幕府による蝦夷地経営の財政負担が厳しかったからともいうが、実際には黒字経営であったともいう。最もうがった見方は、松前藩による幕府への賄賂攻勢によるものだとする説だ。波響はその先頭に立って、文人としての教養も活かしつつ工作に当たったのか。だとすれば、いささかさみしいものがある。復領の33年後安政2年(1855)松前藩は再び幕府により直轄化されることとなる。ペリーやプチャーチン達の黒船騒動の後のことだ。更に明治2年(1868)蝦夷ヶ島は北海道となる。欧米からの近代化という波は、為政者達を待ってはくれなかったのだ。

明治11年(1878)、イギリス女性イザベラ・バードが日本にやってきた。彼女は若者・伊藤を通訳兼従僕として東京で雇い、東日本各地を旅し、有名な紀行文を書き残した。

「日本奥地紀行」がそれである。その中に、こんな箇所があった。蝦夷地から北海道と名を変えていたが、アイヌ人の集落で伊藤の発した言葉がこうだった。「アイヌを丁寧に扱うなんて、彼らはただの犬です。人間ではありません」一彼には偏見があった。犬と人間のアイノコだと信じていた。と、バードは書いている。伊藤は当時18才、幕末は安政7年(1860)の江戸生まれか。庶民の抱く蝦夷地のイメージはこうだったのである。

心の近代化は、ゆっくりとしかやってこないのだろうか。

一茶による最後の蝦夷句はこうだった。

**人の吹く 霧も寒いぞ エゾが島**

文政5年(1822)9月

(了)

参考資料:

- ・『「エゾの歴史」北の人びとと「日本」』(海保嶺夫 1996年刊)
- ・『菅江真澄の旅と日記』(内田武志 1981年刊) ・『黒船前夜』(渡辺京二 2010年刊)
- ・『外交儀礼から見た幕末日露文化交流史』(生田美智子 2008年刊)
- ・『人物叢書「最上徳内」』(島谷良吉 1977年刊) ・『蝦夷地別件』(船戸与一 1995年刊)
- ・『大黒屋光太夫史料集』(山下恒夫編纂 2003年刊)
- ・「アイヌ文化とメディア」(チュプチコセル氏 アイヌ文化交流センター セミナー資料 2000年)
- ・『「小林一茶」時代を読む俳諧師』(青木美智男 2012年刊)
- ・『一茶全集』(信濃毎日新聞社 1978年刊) ・『信濃の一茶』(矢羽勝幸 1994年刊)
- ・『俳諧教師 小林一茶の研究』(渡辺弘 2006年刊) ・『荒凡夫 一茶』(金子兜太 2012年刊)
- ・『信州二人の放浪俳人 一茶と井月』(春日愚良子 2010年刊)
- ・『蠣崎波響の生涯』(中村真一郎 1990年刊) ・『松前藩の画人と近世絵画史』(磯崎康彦 1986年刊)
- ・『北海道俳句史』(北海道新聞社 1978年刊)
- ・『江戸時代「生活文化」総覧』(新人物往来社編 1992年刊)
- ・『忘れられた日本人』(宮本常一 1984年刊)
- ・『日本奥地紀行』(イザベラ・バード 高梨健吉訳 1973年刊)

